

平泉文化と北方交易2 - 擦文期の銅鏡をめぐる -

関根達人

はじめに

平泉文化を東アジア世界の中に位置づける際、王朝国家との関係とともに、蝦夷や擦文集団・アイヌとの政治的・経済的関係を理解する必要がある。奥州藤原氏による北方交易や北方民族との交流関係については、実態が不明のままである。安倍氏、清原氏についても北方交易を基盤として台頭したとの指摘（箕島2001、工藤2005）があるが、具体的な内容が判明しているわけではない。

これまで奥州藤原氏による交易で北からもたらされた産物としては、史料上確認できる「羽毛菌革」（中尊寺供養願文）、「水豹皮」・「鷲羽」（『台記』仁平3年9月14日条、『吾妻鏡』文治5年9月17日条）といった、武器・武具の原材料となる動物性資源や、後の蝦夷地交易で大きな比重を占めることになる昆布等の海産物（食料）が想定されてきた。それらはことごとく有機質であり、出土品はもちろん伝世品ですら確認することが限りなく不可能に近い。また、それらは江戸時代の記録をみれば津軽・下北や蝦夷地の産品であり、それらをもって奥州藤原氏による北方交易の相手先を一挙に大陸系北方民族にまで拡大することなどできない。奥州藤原氏による北方交易に関しては、交易品・交易相手ともに極めて不明確であり、大陸との関係に到っては、中尊寺供養願文にある「肅慎挹婁之海蠻類向陽葵」との記述だけで、関係性を示す物的証拠は従来全く示されてこなかった。

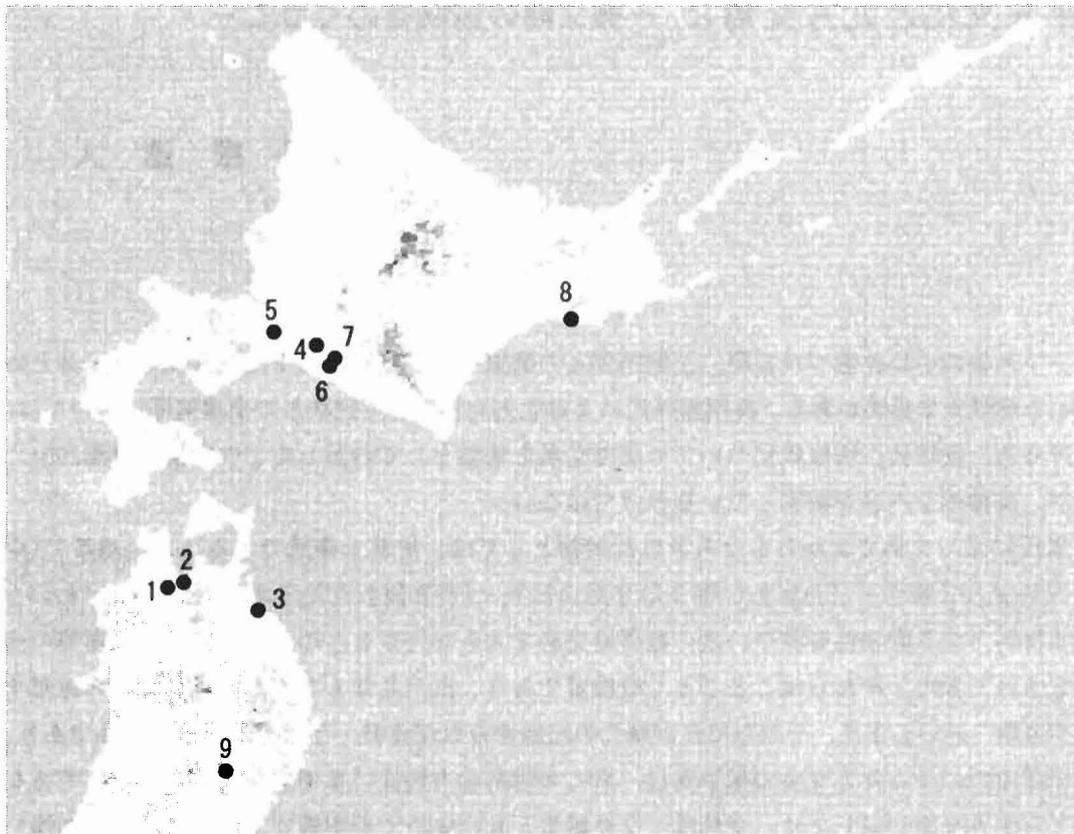
上記のような視点に立ち、昨年度は、北奥出土のガラス玉に関して、考古学的手法による資料化を進めるとともに、自然科学的手法により材質分析を行ない、それらが蝦夷・アイヌによる交易で沿海地方南部から北海道島を經由して本州北部にもたらされたと指摘した（関根2007）。今年度は反対に、北海道の擦文文化後期・アイヌ文化成立期の遺跡から出土する本州産の製品を取り上げ、津軽海峡を挟んだ交易について考察することとした。

擦文文化期に本州から北海道島へもたらされた品物としては、文献史料や出土遺物から、麻布・絹布、米穀、須恵器、鉄製品・鉄素材などが挙げられているが、生業活動との関係で、とりわけ鉄製品や鉄素材が重要視されている。（瀬川1997、鈴木信2003・2004、鈴木琢也2004・2005・2006 a・2006 b）。本州から供給される鉄製品・鉄素材が擦文社会の下部構造に関わる重要産品という点に異論はないが、一方で擦文文化とアイヌ文化との連続性を重視するなら、威信財は上部構造を解明する重要な手がかりと考える。擦文文化期の威力財としては、本州産の刀剣類や漆器、貨幣、サハリン経由で大陸からもたらされたと考えられるガラス玉、そして今回とりあげる銅鏡などが考えられる。

本論では、北日本から出土した擦文・平安時代の銅鏡を手がかりとして、10世紀から12世紀の北方交易の具体像を推察したい。

1. 北日本から出土した銅鏡の概要

これまで北海道・東北北部で出土を確認した擦文・平安時代の銅鏡は、北海道5遺跡12点、青森県3遺跡



- 1 高屋敷館遺跡
- 2 野木遺跡
- 3 林ノ前遺跡
- 4 上幌内モイ遺跡
- 5 カリンバ2遺跡
- 6 亜別遺跡
- 7 カンカン2遺跡
- 8 材木町5遺跡
- 9 横枕Ⅱ遺跡

図1 北日本における擦文・平安期の銅鏡出土遺跡

表1 北日本から出土した擦文・平安期の銅鏡一覧

図2 番号	遺跡名	区・遺構・層位	種別	年代	主要金属比率(%)			材質分析法・分析者	文献
					Cu	Pb	Sn		
1	高屋敷館遺跡	第82号住居跡覆土	不明	10C末~11C	78.1	2.4	11.1	ICP-AES法・赤沼英男	青森県教育委員会1998
2	野木遺跡	第335号堅穴住居跡カマド煙道部掘方埋土	A	10C前半	58	1.2	24.4	ICP-AES法・赤沼英男	青森県教育委員会1999・2000
3	林ノ前遺跡	SI07堆積土	不明	10C末~11C前半	77	—	21.1	EDS半定量分析・村上隆	青森県教育委員会2005・2006
4	林ノ前遺跡	SK359堆積土	不明	10C末~11C中葉	76.5	—	21.2		
5	林ノ前遺跡	SK543埋1層	B	10C中葉~11C	73.1	22.8	—		
—	林ノ前遺跡	SI127堆積土	不明	10C中葉~11C	77.2	—	21.5		
6	上幌内モイ遺跡	遺物集中区1	B	10C後葉~11C 前葉	78.2	4.6	10.1	ICP-AES法・赤沼英男	厚真町教育委員会2007
7	上幌内モイ遺跡	遺物集中区2	A		67.9	0.2	26.3		
8	上幌内モイ遺跡	遺物集中区2	A		80.8	1.4	14.3		
9	上幌内モイ遺跡	遺物集中区2	B		78.7	1.1	14.3		
10	上幌内モイ遺跡	遺物集中区18	B	10C中~後葉	76.7	2.9	9.2		
11	カリンバ2遺跡	SH-1住居跡炉北側	A	10C中葉~11C	銅に次いで錫を多く含む			蛍光X線・村上隆	恵庭市教育委員会1998
12	亜別遺跡	F-7区	A	10C中葉~11C	未分析				平取町教育委員会2000
13	カンカン2遺跡	X-1周溝盛土遺構	B	10C中葉~11C	81.9	6.5	1.8	ICP-AES法・赤沼英男	平取町教育委員会1996
14	カンカン2遺跡	X-1周溝盛土遺構	B		80.3	15.4	0.1		
15	カンカン2遺跡	X-1周溝盛土遺構	A		78.9	2.8	10.9		
—	カンカン2遺跡	X-1周溝盛土遺構	不明		未分析				
16	材木町5遺跡	第2号住居跡床面付近	B	11C~12C	未分析				釧路市埋蔵文化財調査センター1989
17	横枕Ⅱ遺跡		B	9C後半	未分析				水沢市教育委員会1982

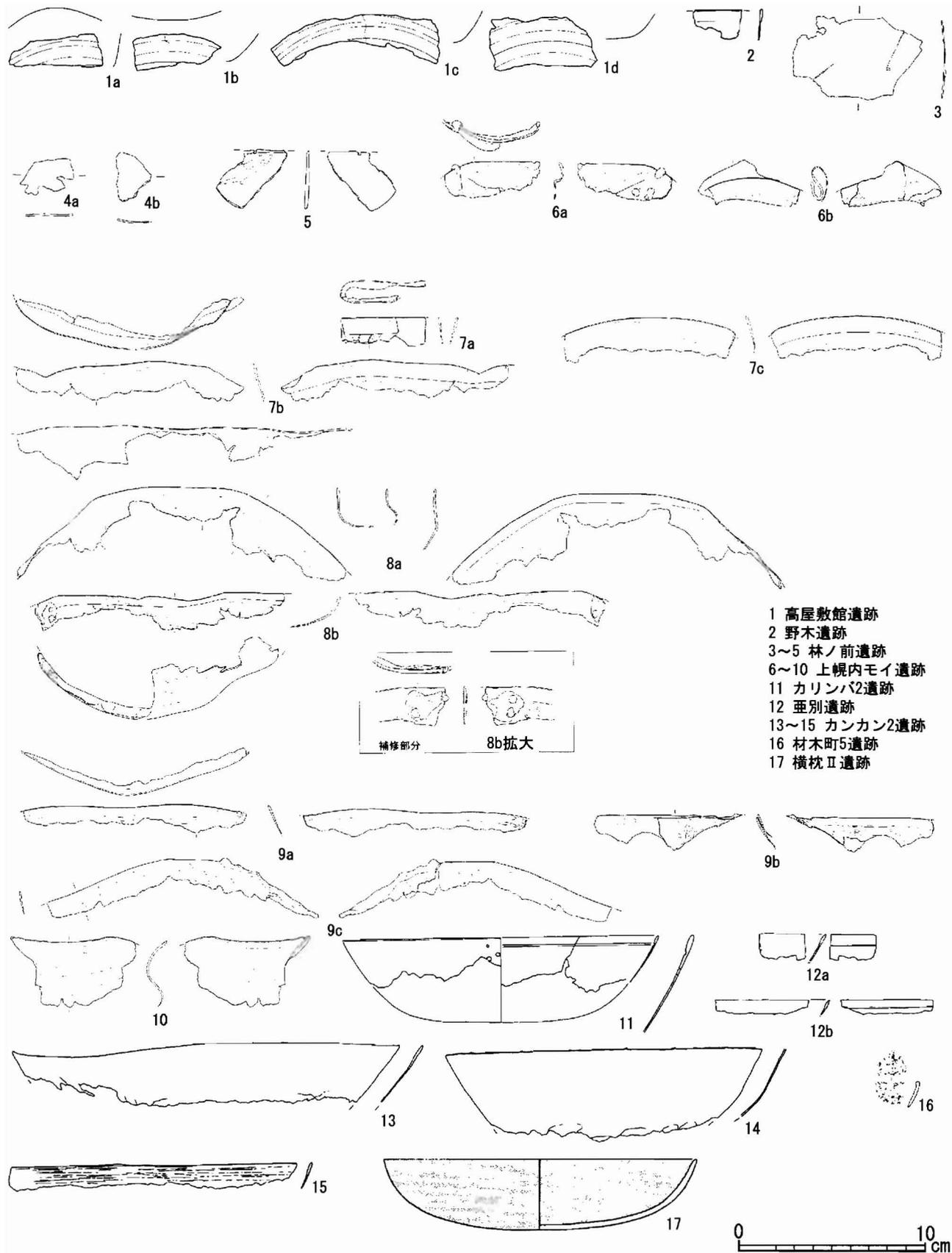
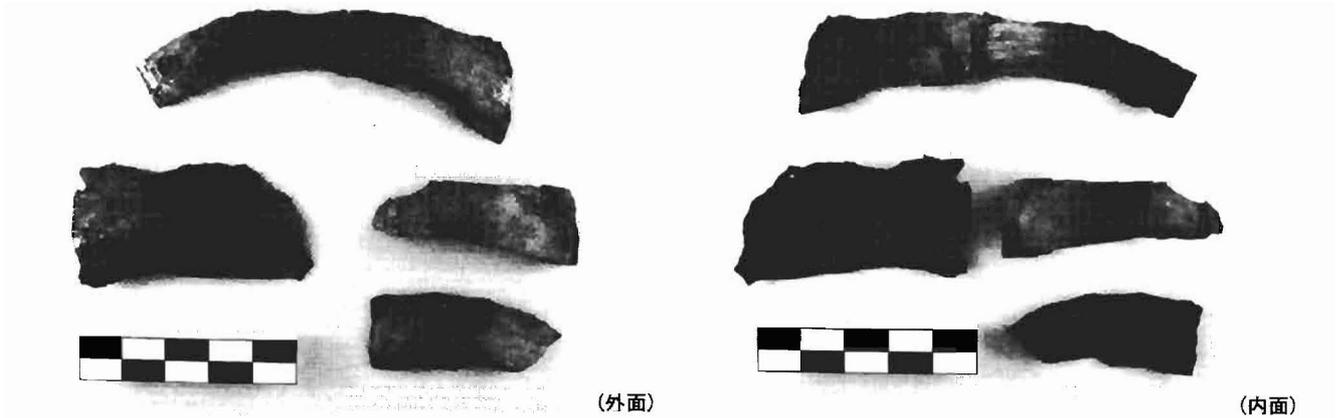
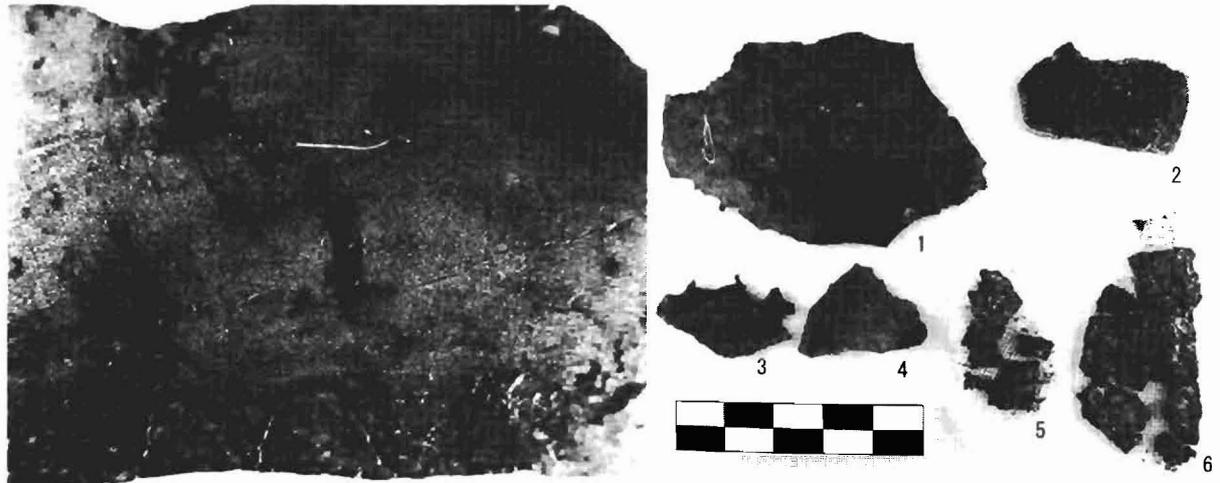


図2 北日本から出土した擦文・平安期の銅鏡

図中の番号は表1に対応する



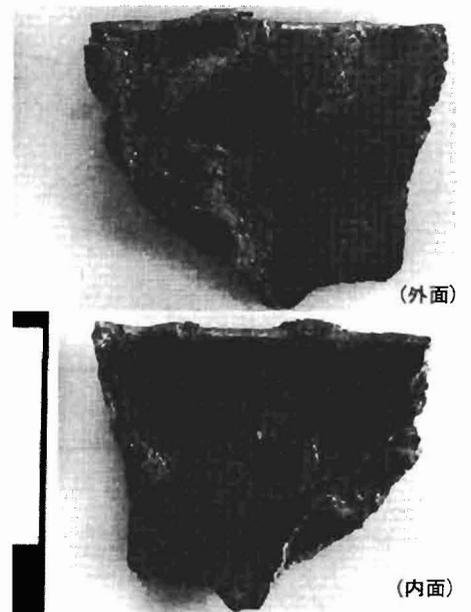
1a 高屋敷遺跡第82号住居跡出土銅鏡



1b 高屋敷遺跡第82号住居跡出土銅鏡外面に見られる轆轤挽き痕 2 林ノ前遺跡出土銅鏡 (1:S107 2:SK543 3・4:SK359 5・6:S1127)



3 カリンバ2遺跡SH-1住居跡出土銅鏡 (内面)



4 材木町5遺跡第2号住居跡出土銅鏡

図3 主な銅鏡の写真

6点、岩手県1遺跡1点の合計19点である(表1、図1～3)。北海道七飯町で第6回東日本埋蔵文化財研究会が行われた1997年の段階では、北日本では北海道の2遺跡から出土した5個体が知られていたに過ぎず、ここ10年間でその数は飛躍的に増加している。以下では、遺跡毎にそれらの概要を述べる。

【高屋敷館遺跡】 青森県青森市高屋敷字野尻(図2-1、図3-1、図4)

国史跡高屋敷館遺跡は、堀の内側に土塁をもつ平安時代の環壕集落としてつとに有名である。集落は9世紀後半に始まり、10世紀後半には堀が築かれ、12世紀前半まで存続したと考えられている。銅鏡は壁建ち構造の第82号住居跡南西隅付近の覆土から出土している。第82号住居跡の年代は、重複関係や出土した土師器から10世紀末から11世紀と考えられる。

出土した銅鏡の破片5点のうち1点は接合し、外見上も材質分析結果からも全て同一個体と考えられる。口縁部は失われており底部から体部下半部のみ遺存する。器胎は極めて薄く、内外面には轆轤挽きにより生じたと考えられる横方向の微細な線状痕が看取される。材質分析の結果、銅に次いで錫を多く含む「佐波理」であることが判明している。

【野木遺跡】 青森県青森市合子沢字松森(図2-2、図5)

野木遺跡は、500棟近い竪穴住居跡・鉄生産関連遺構・土器焼成遺構・畑跡などが検出された9・10世紀の大規模集落跡である。10世紀前半と考えられる第335号竪穴住居跡のカマドの煙道部掘り方から銅鏡の口縁部破片が出土している。銅鏡は口縁部が折り返されており、器胎は約0.1mmと極めて薄い。今回集成した銅器のうち、材質分析が行われているもののなかでは上幌内モイ遺物集中区2出土の銅鏡に次いで錫の含有率が高い。

【林ノ前遺跡】 青森県八戸市尻内町字熊ノ沢(図2-3～5、図3-2、図5)

林ノ前遺跡は、10世紀後半から11世紀代に営まれた大規模な環壕集落である。遺跡内では鍛冶炉などの鉄生産関連遺構・遺物とともに銅の地金や銅が付着した埴塙が出土しており、銅製品も生産されていたと考えられている。林ノ前遺跡では銅鏡の破片と考えられる遺物が4個体分出土している。このうちのSI07、SK359、SI127出土の3個体は、銅に次いで錫を21%程度含む「佐波理」である。それらは金属板を薄く叩いて伸ばしながら成形しており、なかでも器胎が約0.2mmと薄いSI07出土のものは仕上げに轆轤挽きされている。残るSK543出土の銅鏡は、砒素を含む銅と鉛の合金を鋳型に流し込むことによって作られており、厚みがある。

【上幌内モイ遺跡】 北海道勇払郡厚真町幌内(図2-6～10、図7・8)

石狩低地帯南部の東縁、厚真川上流域に位置する上幌内モイ遺跡では、擦文文化期の円形周溝遺構、竪穴、土墳墓とともに焼土や遺物集中区が多数検出されている。銅鏡は遺物集中区1で1個体、同じく2から3個体、同じく18から1個体、合計5個体が発見されている。材質分析の結果、これらの銅鏡は個体により若干の差はあるものの、全て銅に次いで錫の含有率が高い「佐波理」であることが確認されている。

集中区1のものは口縁部破片で、被熱し大きく変形している。口縁を折り曲げた痕跡は見られない。集中区1から出土した遺物は銅鏡に限らず大半が被熱した上、土器は故意に細かく割られ、炭化したキビの塊など特殊な遺物も見られることから、報告書では儀礼的行為が行われた場所の可能性が高いと指摘されている。

集中区2からは3個体分の銅鏡が出土しているが、全て被熱しており変形が著しい。口縁部を内側に折り返すものは2個体あり、そのうち折り返し幅の狭いものは内外面に銅板をあてて鋌留した痕跡が見られる。また、縁を折り返さないものは、内外両面に轆轤挽きの痕跡が明瞭に残る。集中区2も基本的な在り方は1と似ており、儀礼的行為が行われた場所であろうか。

集中区18から出土した銅鏡は口縁部資料だが、被熱による変形が著しく保存状態も良くない。口唇部は幾

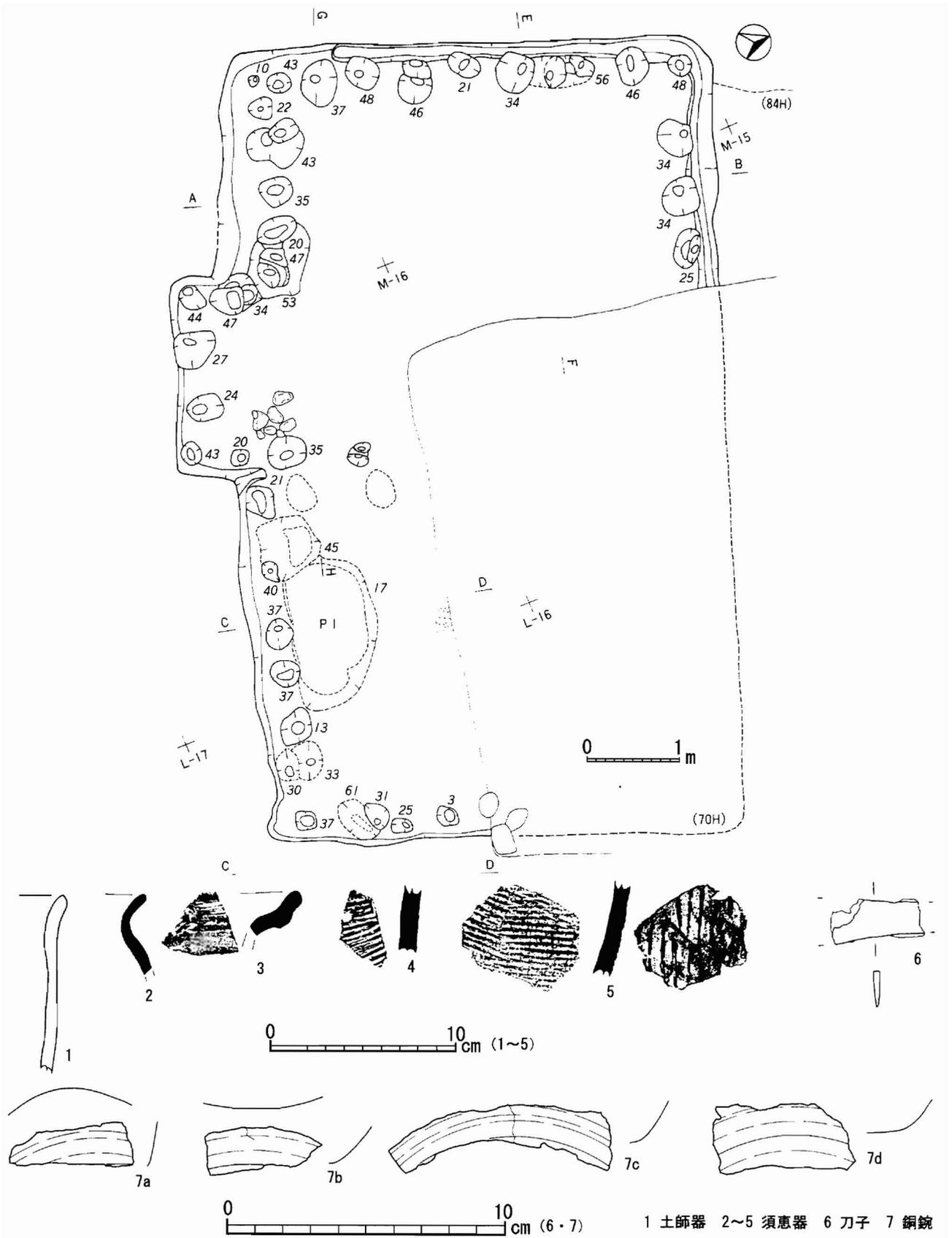


図4 青森市高屋敷館遺跡第82号住居跡と出土遺物

(報告書より転載)

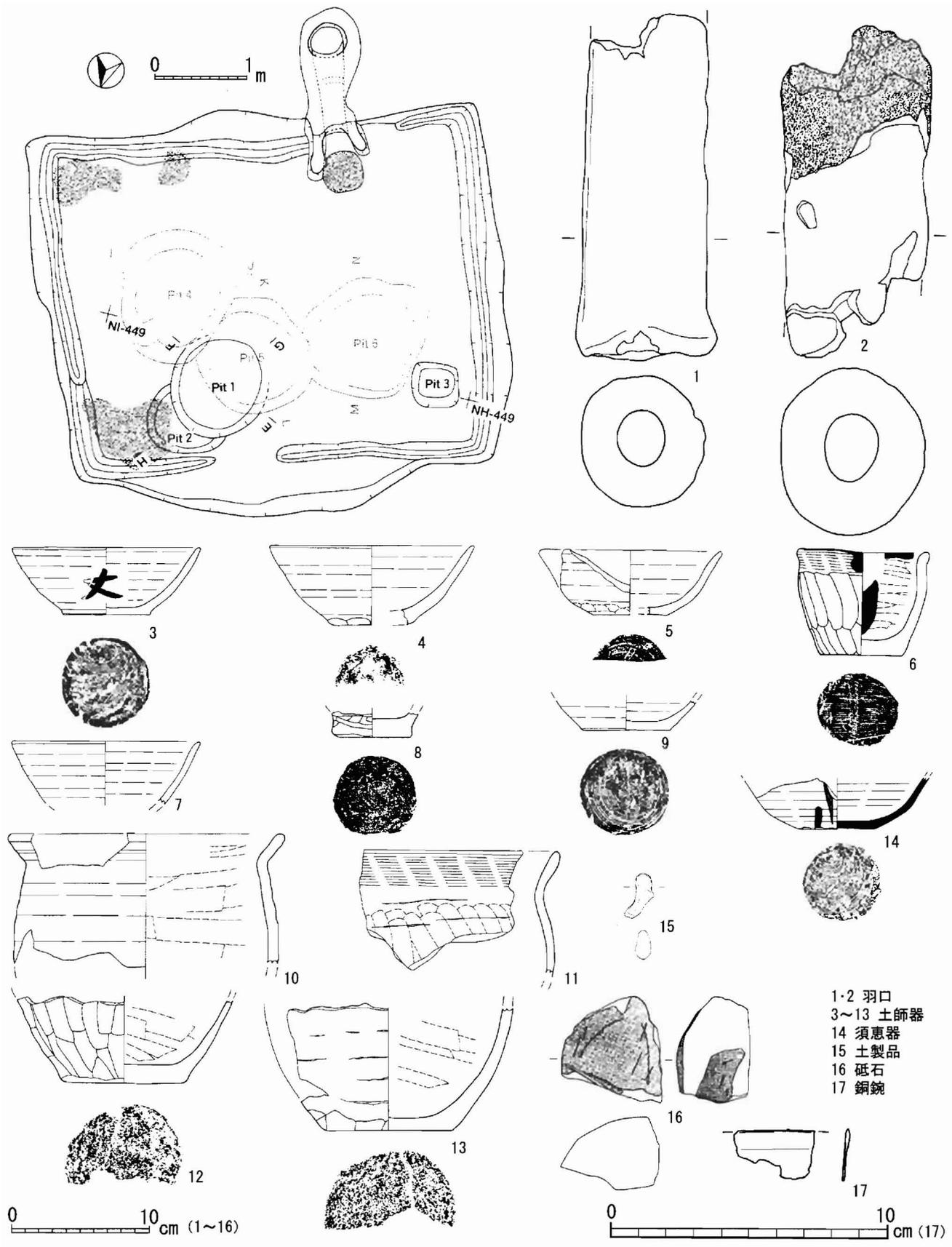


図5 青森市野木遺跡第335号竪穴住居跡と出土遺物

(報告書より転載)

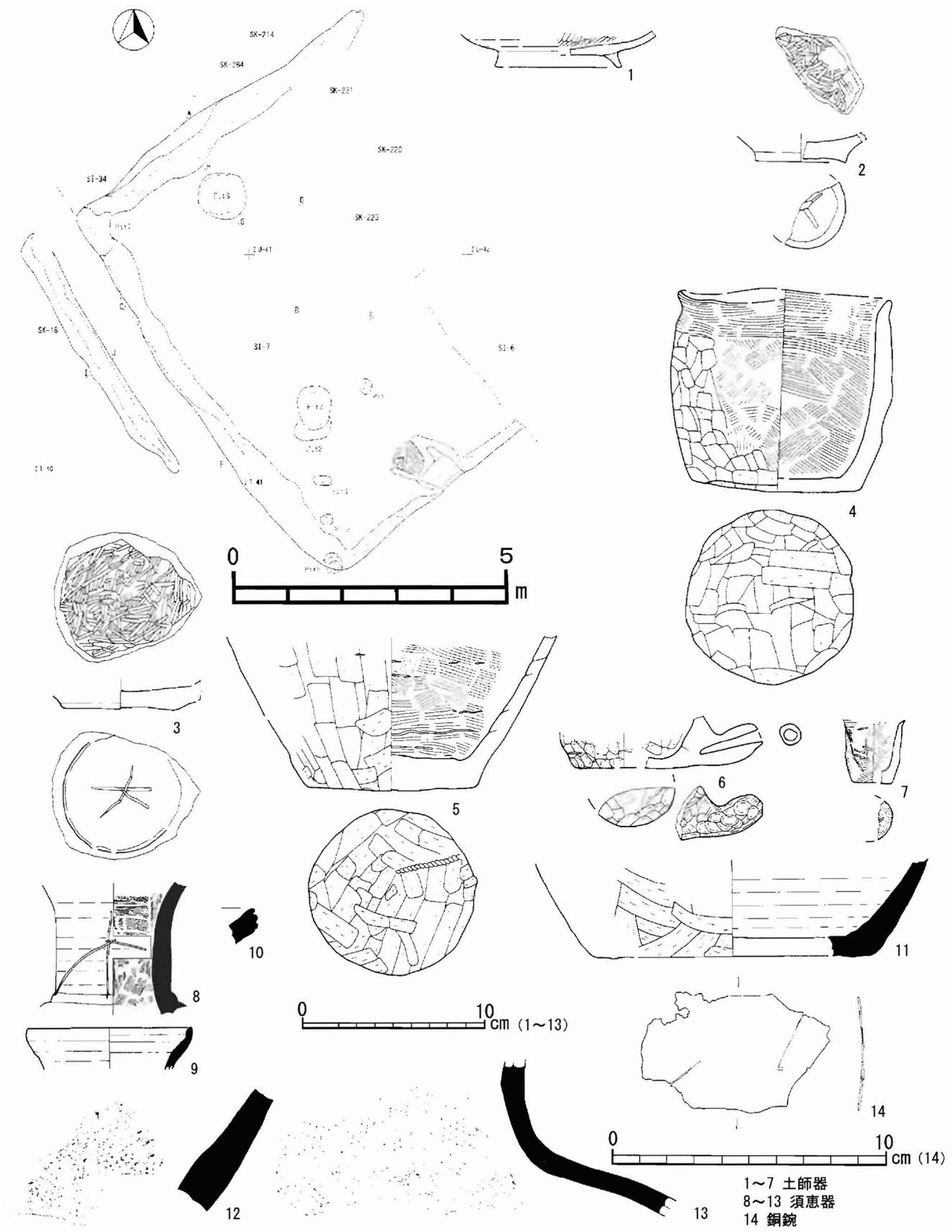


図6 八戸市林ノ前遺跡SI07住居跡と出土遺物

(報告書より転載)

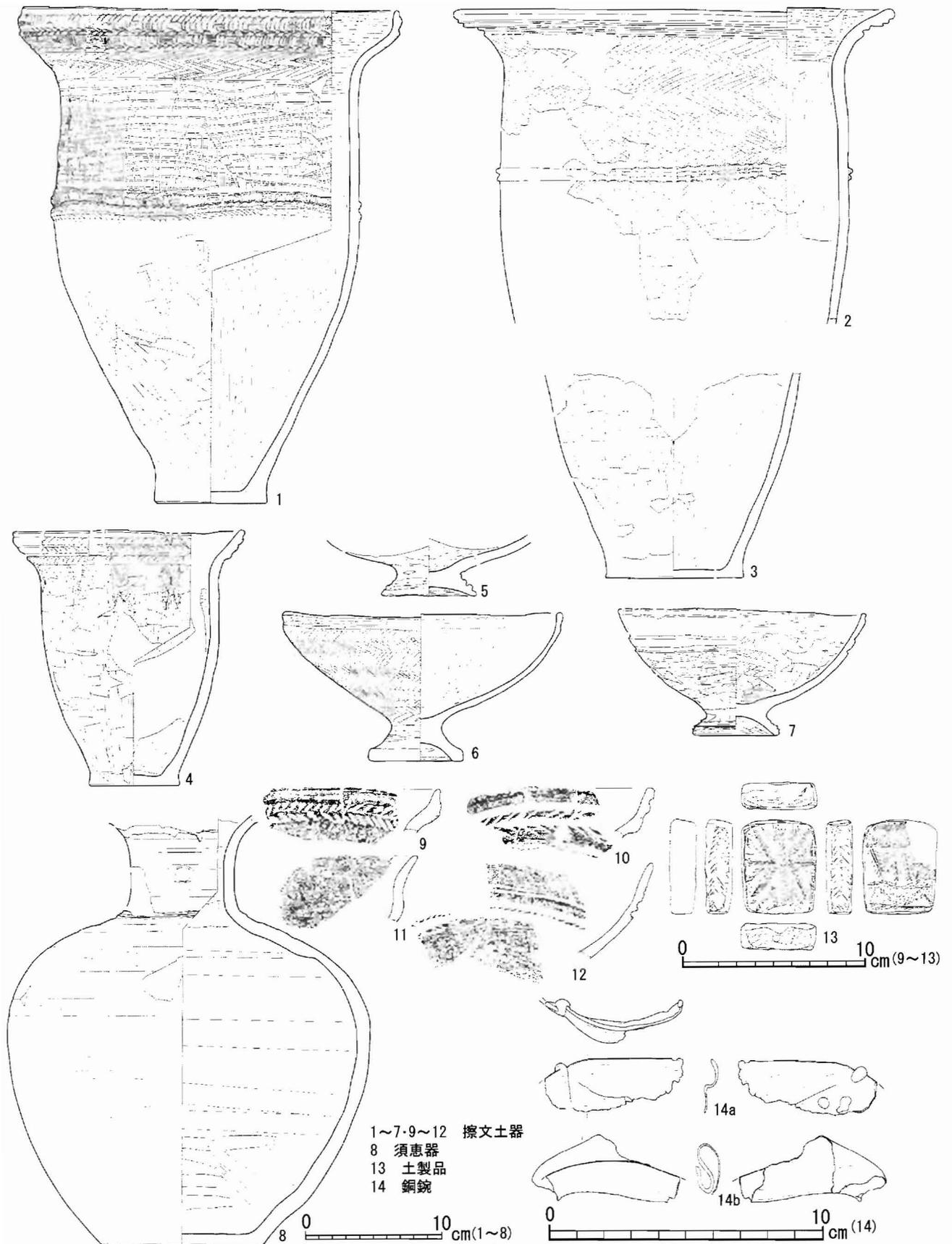


図7 北海道厚真町上幌内モイ遺跡集中区1出土遺物

(報告書より転載)

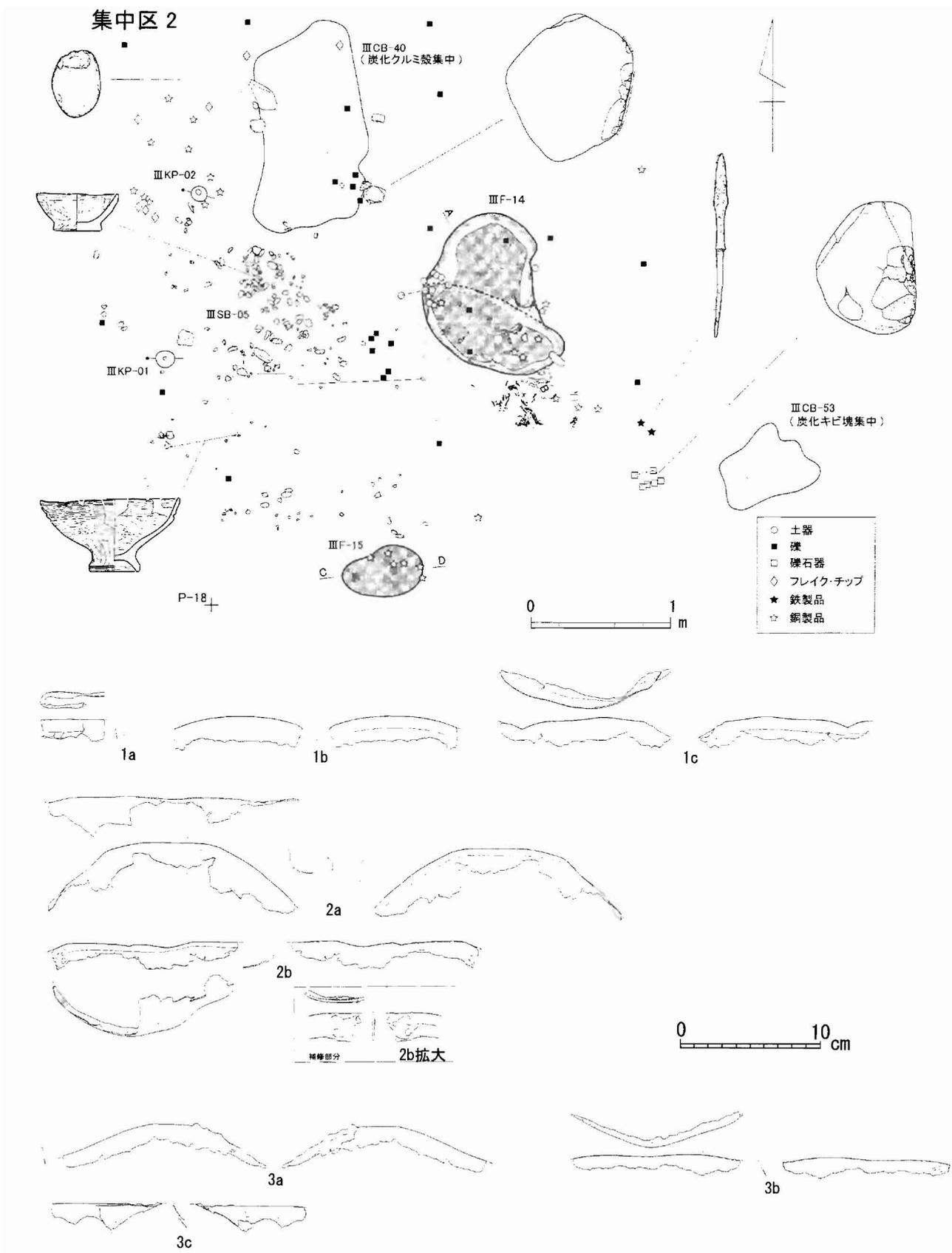


図8 北海道厚真町上幌内モイ遺跡集中区2遺物出土状況と出土銅鏡

(報告書より転載)

分肥厚し尖る。同一個体と思われる破片が集中区1からも出土している。

銅鏡が出土した遺構の年代は、相伴した土器や焼土中の炭化種子を試料としたAMS法年代測定結果から、集中区1と2が10世紀後葉～11世紀前葉、集中区18は10世紀中葉～後葉と考えられる。

【カリンバ2遺跡】 北海道恵庭市黄金（図2-11、図3-3、図9）

石狩低地帯の南西部、旧カリンバ川右岸に位置するカリンバ2遺跡では、擦文文化期の竪穴住居跡SH-1で炉の北側から銅鏡が1点出土している。銅鏡は口縁部を伏せた状態で発見され、破片の一部は覆土の下層からも発見されている。口径約17cmに対して高さは約4.6cmと浅く、底は平らで大きい。口縁部は約1cm幅で内側に折り曲げられており、その縁には細い沈線が1条巡っている。口唇部は丸みを帯びており、厚さ約1.5mm、胴部から底部は厚さ0.3mmしかない。内外面には轆轤挽きの痕跡が横方向に、底部には同心円状に残る。口縁部直下、沈線部には後から補修孔と思われる小孔が穿けられている。現状では漆黒色を呈するが、蛍光X分析の結果、銅にかなりの割合で錫を加えた「佐波理」であることが判明している。10世紀中葉から11世紀代の年代が与えられる。

【亜別遺跡】 北海道沙流郡平取町川向（図2-12、図10）

亜別遺跡は、日高支庁管内西部のやや内陸寄り、日高山脈を源とする沙流川の左岸、河口からは約16km遡った場所に位置する。銅鏡は、F-7区から破片数にして118点、総重量10.8gが出土したが、全て同一個体である。口縁部は5～6mm幅で内側に折り曲げられており、その部分は1～0.8mmほどの厚みを有する。体部から底部は轆轤挽きにより薄く仕上げられている。銅鏡に相伴した擦文土器は、10世紀後半から11世紀頃の所産と考えられる。

【カンカン2遺跡】 北海道沙流郡平取町二風谷（図2-13～15、図11）

カンカン2遺跡は、日高山脈を源とする沙流川と看看川が合流する左岸段丘上、河口からは約19km遡った場所に位置する。銅鏡は白頭山-苫小牧火山灰（B-Tm）降下後まもなく営まれたと考えられるX-1周溝盛土遺構の最上層から出土した。銅鏡の破片502点は4個体に判別されている。

13は口縁部に錐状の工具による穿孔が認められる。口縁部の厚みは約1.6mm。材質は銅と鉛の合金で、砒素も含まれる。伏せられた状態で出土した14は、口縁部が鑿状の工具で水平に裁断されている。縁の厚みは約1.1mm。材質は13に近く、錫をほとんど含んでいない。15は口縁部を幅6mmほど内側に折り曲げている。内外面には横方向に轆轤挽きの痕跡が認められる。材質は銅と錫の合金、いわゆる「佐波理」である。図示していないもう一つの個体は、材質的には13・14に近く、砒素を含む銅と鉛の合金で作られている。銅鏡が出土した周溝盛土遺構は、長軸約8m、短軸約5.7mで、溝が方形に巡る。盛土の高さはおよそ25cm、内部に土壌などの掘り込みは一切検出されていない。銅鏡等の遺物は、盛土の最上層からほぼ原位置を保った状態でまとまって出土している。相伴資料の中でとりわけ注目されるものに丸棟平造りで切先が両刃になる直刀がある（図11-15）。この太刀は、京都の鞍馬寺に伝わる伝坂上田村麻呂佩刀の葵鏢に類似する透かしを有する鏢と鉄製の鍔が直接茎に摺り合う形で装着されていることから、東北地方の末期古墳から出土する刀剣類に比べより日本刀に近く、中央政府またはその影響下にある地域から運び込まれたと指摘されている（佐藤ほか2003）。遺構の年代は火山灰や土器をはじめとする出土遺物から、10世紀中葉から11世紀とみられる。報告書では、周溝盛土遺構は祭祀遺構であり、銅鏡や太刀・鉾をはじめとする宝物は、供献品と推測している。

【材木町5遺跡】 北海道釧路市材木町7・8番地（図2-16、図3-4、図12）

材木町5遺跡は、釧路川の河口から約2km遡った左岸の海岸段丘上に位置する。銅鏡は第2号住居跡の西側、カマドとは反対側の床面付近からおびただしい数の黒曜石の剥片とともに出土した。銅鏡は口縁部の小

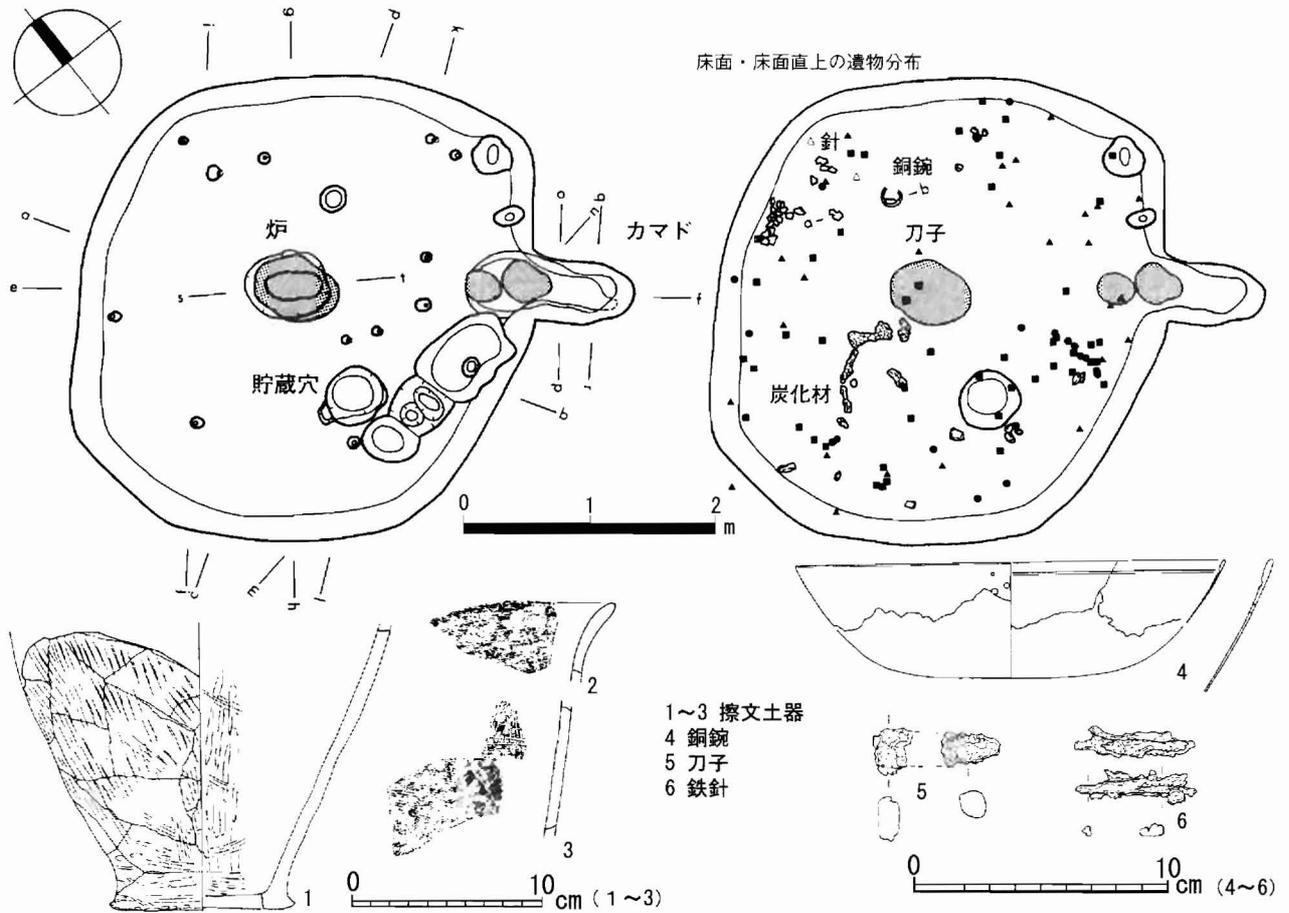


図9 北海道恵庭市カリンバ2遺跡SH-1住居跡と出土遺物

(報告書より転載)

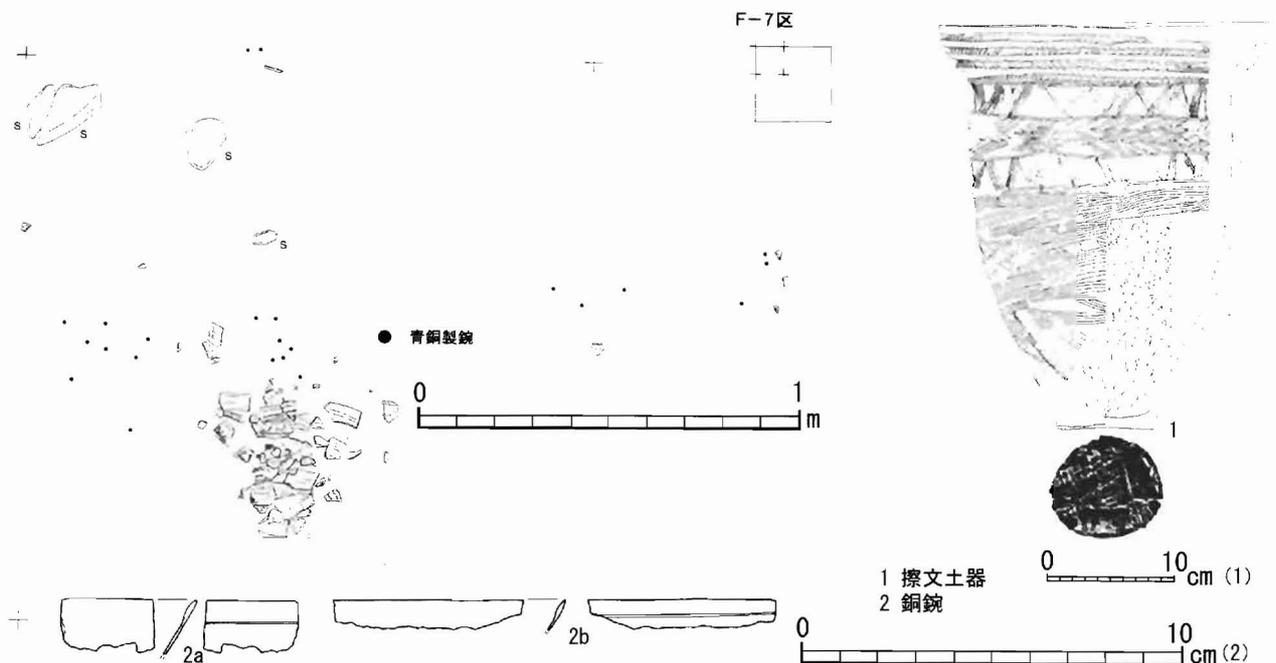


図10 北海道平取町垂別遺跡F-7区出土遺物と遺物出土状況

(報告書より転載)

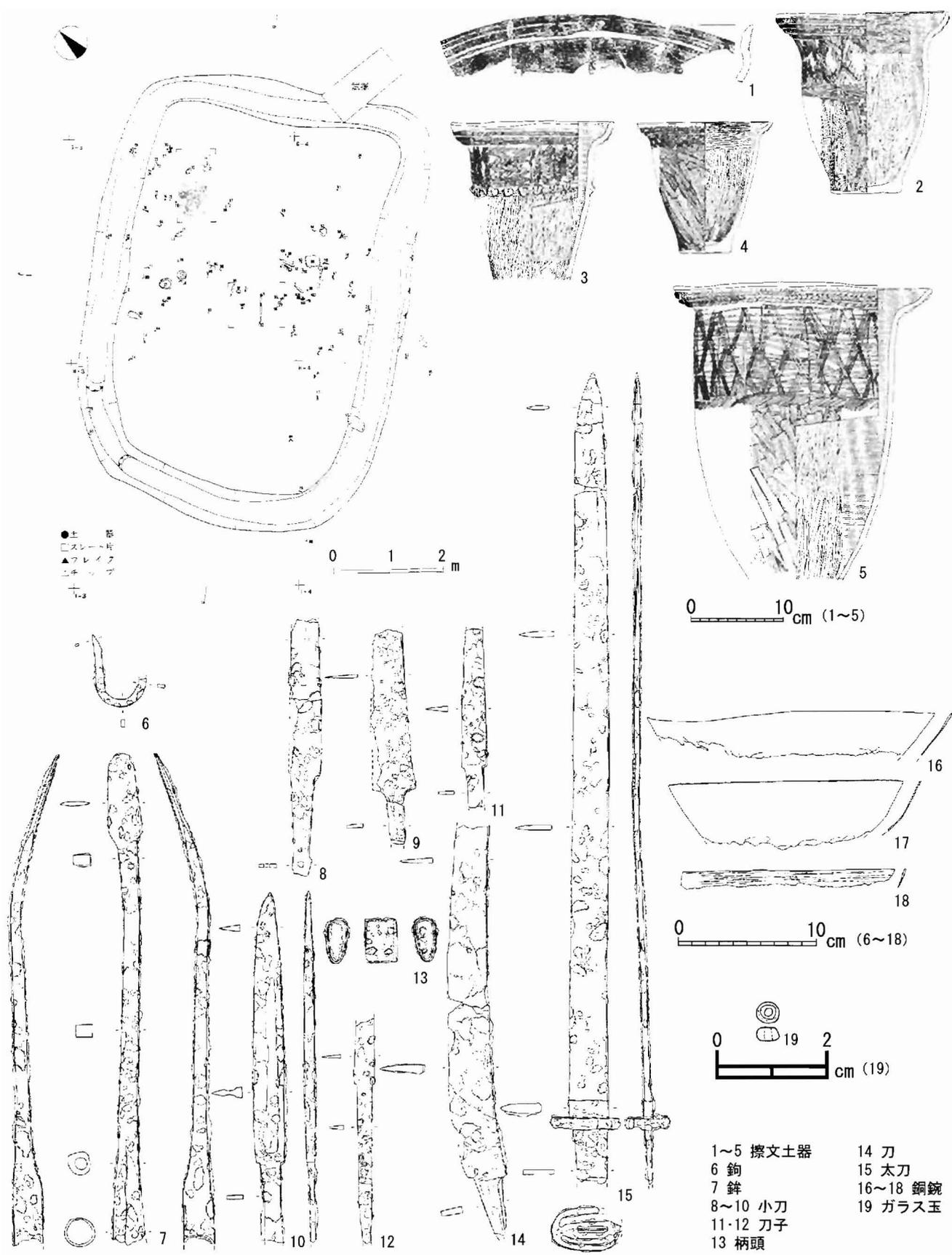


図11 北海道平取町カンカン2遺跡X-1周溝盛土遺構と出土遺物

(報告書より転載)

- | | |
|----------|----------|
| 1~5 擦文土器 | 14 刀 |
| 6 鈎 | 15 太刀 |
| 7 鏃 | 16~18 銅鏡 |
| 8~10 小刀 | 19 ガラス玉 |
| 11-12 刀子 | |
| 13 柄頭 | |

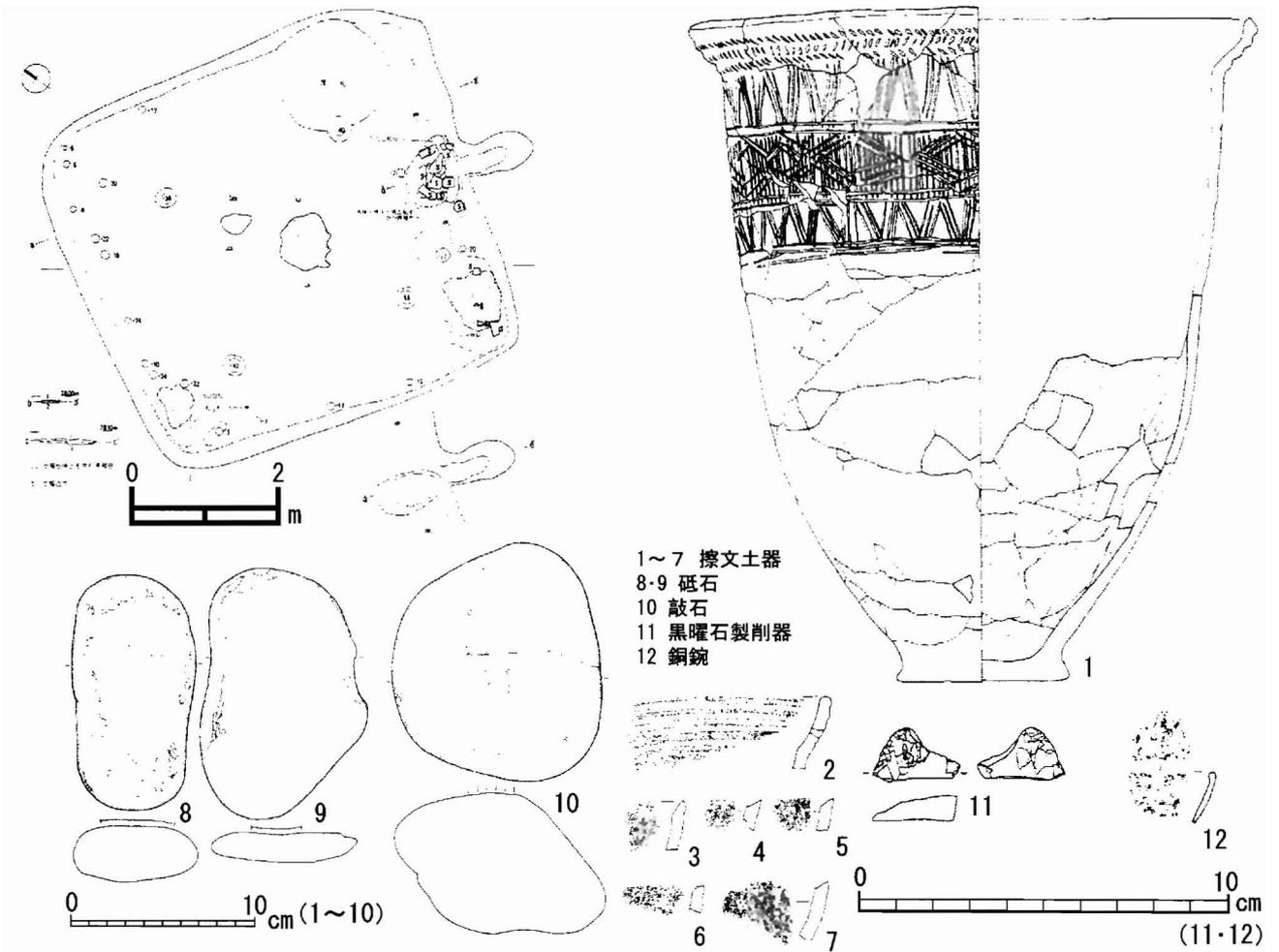


図12 北海道釧路市材木町5遺跡第2号住居跡と出土遺物

(報告書より転載)

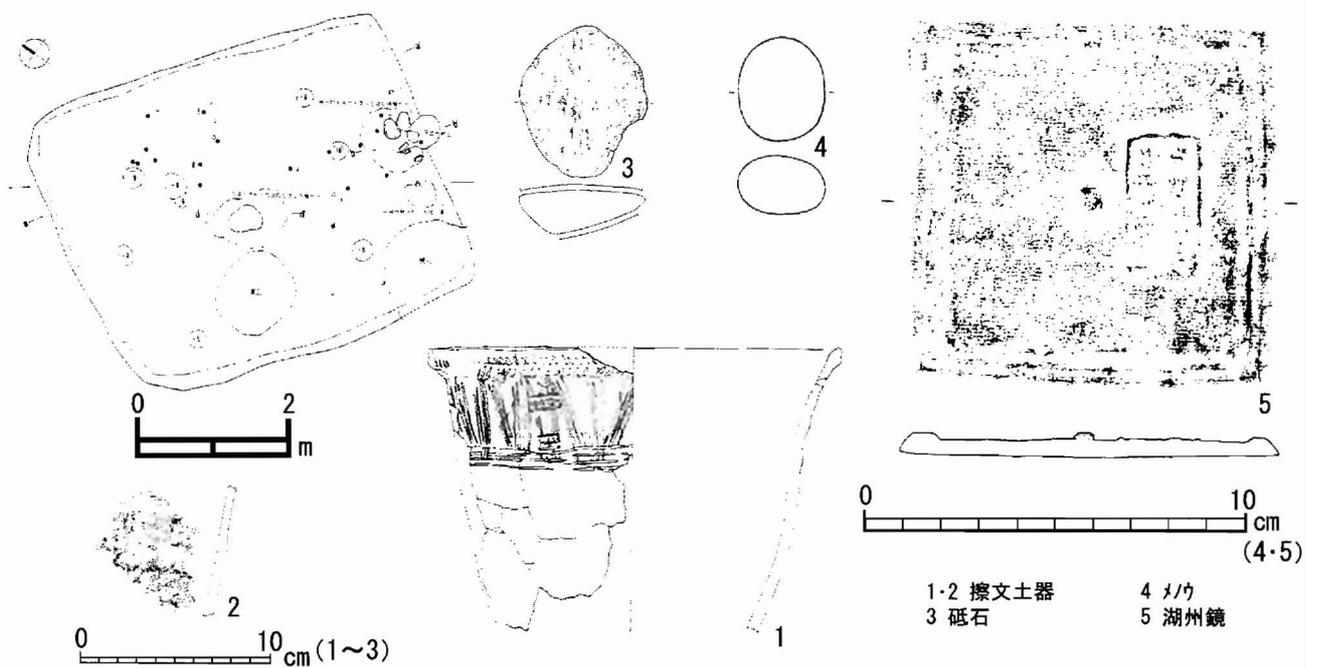


図13 北海道釧路市材木町5遺跡第15号住居跡と出土遺物

(報告書より転載)

破片で、口縁部は丸みを帯びて肥厚する。器厚は口縁部で2.1mm、体部では0.5mm前後である。二次的に熱を受けており、器胎の一部に空洞が生じているほか、内外面には熔けた金属の小塊が付着している。第2号住居跡の年代は、出土した擦文土器から11世紀後半から12世紀頃と見られる。なお、材木町5遺跡では、第15号住居跡の床面から中国宋代の「湖州真石家念二叔照子」銘をもつ方鏡が1点出土している（図13）。

【横枕Ⅱ遺跡】 岩手県奥州市水沢区佐倉河字横枕（図2-17、図14）

横枕Ⅱ遺跡は、胆沢城跡から北上川を挟んで南へ約2km、水沢段丘上の沖積面に立地する慶徳遺跡群のひとつである。銅鏡は昭和30年代に土師器とともに出土した。銅鏡は口径約16.8cm、器高約3.9cmである。銅鏡には側面に「寺」の墨書のある土師器坏や灰釉陶器を模倣した内黒高台坏が共伴している。これら共伴した土器から、銅鏡の年代は9世紀後半と考えられる。須恵器甕の破片を転用した硯や「寺」の墨書土器からみて、本遺跡は単なる一般集落ではないだろう。銅鏡も仏具として使われた可能性が高い。

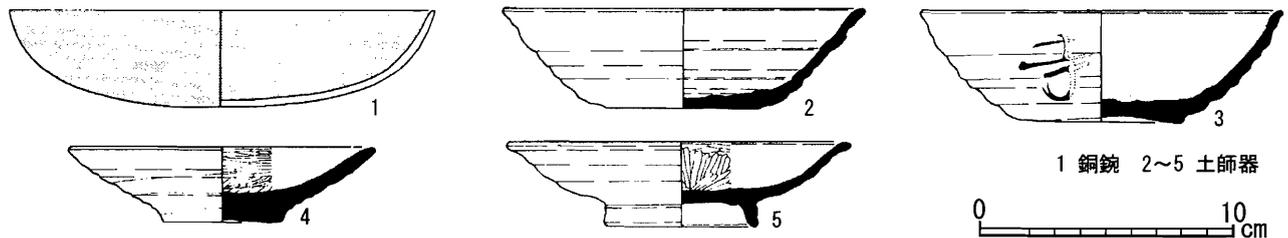


図14 奥州市水沢区横枕Ⅱ遺跡出土銅鏡と共伴した土師器

（報告書より転載）

2. 銅鏡の種類と材質

出土した銅鏡のなかで全体のプロポーションが判る資料は限られているが、そのなかでは最も古い奥州市横枕Ⅱ遺跡例だけが形態が異なる。横枕Ⅱ遺跡の銅鏡は、他のものに比べ、①器胎が厚い、②体部の丸みが強い、③浅いなどの特徴がある。横枕Ⅱ遺跡を除く資料は、比較的残りがよいカリンバ2遺跡やカンカン2遺跡の事例から判断して、口径17cm前後、器高5cm前後の、安定した平底をもつ浅めの鏡と思われる。

口縁部の形状からは、口縁を内側に折り返すもの（A類）と、折り返しのないもの（B類）に分けられるが、両者は数的にはほぼ拮抗する。

19点中15点に関して材質分析が行われており、錫を多く含むものが12点と、鉛を多く含むもの3点を大きく上回っている。口縁部形状との関係では、A類は全て錫を多く含むグループに属する。錫を多く含むグループは、鑄造による成形後、鍛造で叩き締め、轆轤で薄く挽いて仕上げているため、体部の器胎は極めて薄く、内外面には横方向に、底面には同心円状に轆轤挽きの痕跡を残す。

ところで、銅と錫の合金、いわゆる「青銅」は、錫の含有量により多様な色調をみせるという。すなわち錫の古称「白銅」が示す通り、錫が3%以下なら銅赤色だが、錫の含有量が増えるにつれ次第に黄色味が強まり、27%以上になると銀白色を呈するようになる（村上2007）。錫を15~20%程度含む「佐波理」の場合、赤味を帯びた黄色で、色調的にはかなり金色に近い。北日本から出土した擦文・平安時代の銅鏡の大半は、本来、金色に輝いていたと思われる。

3. 銅鏡の年代

北日本では、盛岡市志波城跡の昭和59年度調査においてSI425堅穴住居跡から出土した銅製容器が、共伴

した土師器から8世紀後半の年代が与えられ、最も古い銅鏡になる可能性がある（盛岡市教育委員会1985）。これに次ぐのが胆沢城に近い奥州市横枕Ⅱ遺跡から出土した9世紀後半代の銅鏡である。どちらも律令政府による地域支配の拠点施設が置かれた場所であり、後者は共伴した「寺」墨書土器から、胆沢城に付随する宗教施設で使用された仏具であったと推察される。

内国化されていない北の地域で出土した銅鏡のなかで、唯一、青森市野木遺跡第335号住居跡出土例だけが白頭山―苦小牧火山灰降下以前の10世紀前半代に位置づけられ、残りは全て10世紀中葉以降の年代が与えられる。また、共伴する土師器や擦文土器から、釧路市材木町5遺跡の事例を除き、全て下限は11世紀代に収まる。

材木町5遺跡第2号住居跡出土の銅鏡については、共伴した擦文土器の年代が問題となる。道東の擦文土器の年代観については未だ意見の分かれるところであるが、湖州鏡が出土した第15号住居跡の土器に比較して、第2号住居の土器は型式学的には1段階古相を示めず。ところで宋代に浙江省湖州付近で大量生産されたとされる湖州鏡のうち、材木町5遺跡出土品と同じ方鏡は、国内では畿内以東に多いとの指摘がある（久保1987）。西幸隆の集成によれば、湖州方鏡は全国で10遺跡22例が知られており、東北地方では岩手県花巻市丹内山神社経塚（註1）、秋田県横手市八沢木新庄館、山形県羽黒町羽黒山頂御手洗池、福島県会津坂下町塔寺経塚から出土している（西1988）。新庄館出土例と羽黒鏡を除き、残りの8遺跡は全て経塚の埋納品であり、年代的には全て12世紀に属する。材木町5遺跡の事例だけ特段時代を引き下げて見なければならぬ理由はなく、第15号住居跡出土の擦文土器も12世紀の年代を与えてしかるべきである（註2）。故にそれよりやや古い様相の土器に共伴した第2号住居跡出土の銅鏡は11～12世紀の年代幅に収まるものと考えられる。

4. まとめ

平安時代の銅鏡で思い出されるものに、『枕草子』にあるかなまり（鏡）に関する記述がある。清少納言は、「あて（貴）なるもの」（42段）として「削り氷に甘露入れて、あたらしきかなまりに入れたる」を挙げ、「清しと見ゆるもの」（148段）でも「あたらしきかなまり」を挙げた。『枕草子』が書かれた10世紀末・11世紀初頭、都の貴族達の間で、かなまりは清浄で涼やかな器として人気があったと思われる。銅鏡はこの時代、仏具であると同時に、高級食膳具でもあったことが確認される。

暑い夏の日、都の貴族や宮中の女房達がかなまりにいれた氷菓子を愛でていた時代、未だ内国化されていない津軽海峡を銚んだ、本州北端・石狩低地帯周辺域でも、かなまりが受容されていた。

古墳時代後期、6世紀中頃に朝鮮半島からはじめてもたらされた銅鏡は、6世紀から8世紀代には東日本でも宮城県以南において、主として古墳や横穴から副葬品として出土するとともに、それを模した土師器や須恵器が作られている。しかし9世紀以後の王朝国家の時代に至ると、すくなくとも東日本から銅鏡は姿を消してしまう。その時代になって突如として北の世界に銅鏡が現れるのである。

石狩低地帯を中心に噴火湾沿岸や日高地方など襟裳岬以西の太平洋沿岸地域では、9世紀代に文様帯の下端に貼付圍繞帯を巡らせる土器が分布するが、10世紀後葉には本州北端、岩木川水系中下流域・陸奥湾沿岸・下北半島にまで分布を拡大する（齊藤2002）。こうした考古学的事象から、「道央部を含む太平洋沿岸の集団は、日本海沿岸の交易ルートが日本海沿岸集団に管掌されることとなった10世紀後葉、おそらくそれと競るように太平洋沿岸のルートに活路を求め、本州北端に積極的に進出」（瀬川1997）したとの説が提起されている。銅鏡はまさに道央部を含む太平洋沿岸に分布しており、時期的にも「太平洋沿岸交易集団」が活躍した時代にあたる。銅鏡を受容したのは、「太平洋沿岸交易集団」なのである。

北の世界から出土する銅鏡には「佐波理」と呼ばれる材質・加工技術ともに秀でた製品が含まれることから、その搬入ルートに関しては、本州経由ではなく朝鮮半島から北まわりでもたらされた可能性が指摘されている（村上2007）。その場合サハリンを経由したと考えられるが、これまでサハリンで確認されている擦文土器の多くは11世紀前半の北海道日本海北部域の土器である。もし北まわりのルートでもたらされたなら、銅鏡を入手できたのは「日本海交易集団」であってしかるべきである。銅鏡の分布状況はあきらかにそれらが本州経由でもたらされたことを示している。

ではどのような経緯で銅鏡は「太平洋沿岸交易集団」に渡ったのであろうか。

『類従三代格』（巻19・禁制事）所収の延暦21年6月24日太政官符では、王臣諸家が渡嶋狄と私的に毛皮を交易することが禁じられており、9世紀初頭には既に毛皮交易を媒介として、王臣家と擦文集団とが接点を有していたことが推察される。銅鏡は「太平洋沿岸交易集団」がもたらす北の産物に対する見返りとして、都の王臣家が用意した一品だったのではなかろうか。そうであるなら、既に内国化された北緯40度以南の東北中部・南部から銅鏡が出土しないことの説明もつく。

それでは何故、銅鏡は「日本海交易集団」には受容されなかったのであろうか。

瀬川拓郎は、10世紀以降、擦文社会に流通していた本州製品には須恵器など青森産のものが目立つことなどから、北方交易における本州側の窓口は青森にあり、擦文集団にわたる本州製品も、本州各地に運ばれるワシ羽や海獣類の皮といった北の世界の宝も、そこを介してやりとりされたと指摘する（瀬川2007）。北海道南西部に分布する土師器と擦文土器との中間的様相を示す土器は、本州では津軽地方の岩木川水系の遺跡からのみ出土することから、瀬川によって「青苗文化」と命名された人々は、日本海沿岸の擦文集団と精神文化を共有する一方、婚入により岩木川水系の集団とも同族的な関係を維持していたとされる（瀬川2005）。「日本海交易集団」の本州側の窓口は岩木川水系であり、おそらくは岩木川の河口に広がる十三湖周辺に存在していたと推察できよう。一方、「太平洋沿岸交易集団」の本州側の窓口としては、陸奥湾に面する外が浜が有力視される。陸奥湾に注ぐ新田川の河口に近い青森市新田（1）遺跡は10世紀後半から11世紀代の土器とともに、齋串、馬形・刀形などの形代や付札木簡、桧扇など律令的遺物が出土したことで近年注目されている。外が浜には五所川原産の須恵器や岩木山麓で生産された鉄製品・鉄素材、陸奥湾沿岸で作られた塩など北奥の生産物に加え、内国域からも様々な品々が集められたであろう。遠路都から運ばれた銅鏡もそうした品の一つと考えられる。上幌内モイ遺跡やカリンバ2遺跡の銅鏡が補修されていることから判るように、金色に光り輝く銅鏡は、擦文人にとって威信財と呼ぶに相応しい貴重な宝物であったようだ。

12世紀、日本は中国を中心とする東アジアの巨大な物流機構に組み込まれ、中世世界に汎列島の商品経済圏が形成されるなか、北方交易においては時代を経る毎に日本海交易の比重が高まっていく。釧路市材木町5遺跡から出土した銅鏡や湖州鏡は、12世紀代には、外が浜に到る奥大道の先に太平洋交易ルートが引き続き機能していたことを示しているのではなかろうか。

本稿をまとめるにあたり、資料調査や情報の提供などに関して、次の方々や機関からご協力いただいた。

石川 朗、乾 哲也、井上雅孝、上屋真一、小野哲也、小林 啓、佐藤 剛、佐藤嘉広、竹ヶ原亜希、
蔦川貴祥、松井敏也、三浦圭介（敬称略）

青森県埋蔵文化財調査センター、釧路市立博物館、釧路市埋蔵文化財調査センター、恵庭市郷土資料館、
厚真町教育委員会、平取町立沙流川歴史館

末筆ではありますが、感謝申し上げます。

【註】

- 1 丹内山神社の第2経塚（西経塚）では、方形の石室内に経筒として中国福建省産の白磁四耳壺が納められており、蓋には方形の湖州鏡が使われていた。若手県内で白磁四耳壺を用いた経塚は他に花巻市高松山経塚と奥州市伝豊田跡の事例のみで、いずれも平泉藤原氏の本領地にあたる奥六郡南部に位置する（山本1961、岩手県立博物館2000）。
- 2 第15号住居跡から出土した木炭については同一試料が学習院大学理学部と社団法人日本アイソトープ協会により14C年代測定が行われており、前者では850±90B.P.（Gak-13580）、後者では1050±80B.P.（N-5291）の年代が得られている。後者の年代は擦文土器のどの年代観とも全く整合しない。前者の数値に従えば、第15号住居跡は12世紀を中心とする年代となり、湖州鏡の年代観とも矛盾しない。

【引用・参考文献】

- 青森県 2005『青森県史』資料編 考古3（弥生～古代）
- 青森県教育委員会 1998『高屋敷館遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
- 青森県教育委員会 1999『野木遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第264集
- 青森県教育委員会 2000『野木遺跡Ⅲ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第281集
- 青森県教育委員会 2005『林ノ前遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第396集
- 青森県教育委員会 2006『林ノ前遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第415集
- 青森県教育委員会 2007『赤平(2)・赤平(3)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第438集
- 青森市 2006『青森市史』資料編1 考古
- 厚真町教育委員会 2007『上幌内モイ遺跡(2)』
- 天野哲也・小野裕子編 2007『古代蝦夷からアイヌへ』 吉川弘文館
- 岩手県立博物館 2000『岩手の経塚』 岩手県立博物館第50回企画展図録
- 恵庭市教育委員会 1998『カリンバ2遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡』
- 釧路市埋蔵文化財調査センター 1989『釧路市材木町5遺跡調査報告書』
- 工藤雅樹 2005『古代蝦夷の英雄時代』 平凡社
- 久保智康 1987「平安後期出土鏡の研究序説」『東アジアの考古と歴史』下 489～511頁 同朋社
- 斉藤 淳 2002「本州における擦文土器の変遷と分布について」『海と考古学とロマンー市川金丸先生古稀記念献呈論文集』267～283頁
- 佐藤矩康・森岡健治・成田重信・山崎克彦・赤沼英男 2003「自然科学的調査からみたカンカン2遺跡出土直刀の刀剣史における位置」『北海道考古学』39 65～76頁
- 澤井 玄 2007「十一～十二世紀の擦文人は何をめざしたか」『アイヌ文化の成立と変容』241～269頁 法政大学国際日本学研究所
- 鈴木 信 2003「続縄文～擦文文化期の渡海交易の品目について」『北海道考古学』39 29～48頁
- 鈴木 信 2004「古代日本の交易システム～北海道系土器と製鉄遺跡の分布から～」『アイヌ文化の成立～宇田川洋先生華甲記念論文集』65～97頁 北海道出版企画センター
- 鈴木琢也 2004「擦文文化期における須恵器の拡散」『北海道開拓記念館研究紀要』32 21～46頁
- 鈴木琢也 2005「擦文文化における物流交易の展開とその特性」『北海道開拓記念館研究紀要』33 5～30頁
- 鈴木琢也 2006 a 「擦文土器からみた北海道と東北北部の文化交流」『北方島文化研究』4 19～41頁
- 鈴木琢也 2006 b 「北日本における古代末期の北方交易」『歴史評論』678 60～69頁
- 瀬川拓郎 1997「擦文時代における交易体制の展開」『北海道考古学』33 19～26頁
- 瀬川拓郎 2005『アイヌ・エコシステムの考古学』 北海道出版企画センター
- 瀬川拓郎 2007『アイヌの歴史 海と宝のノマド』 講談社選書メチエ401
- 関根達人 2007「平泉文化と北方交易(1)～北奥出土のガラス玉～」『平泉文化研究年報』7 1～13頁
- 中澤寛将 2005「古代津軽における須恵器生産と流通」『中央史学』28 19～41頁
- 西幸 隆 1988「北海道釧路市材木町5遺跡出土の湖州鏡について」『釧路市立博物館紀要』13 1～8頁
- 平取町教育委員会 1996『平取町カンカン2遺跡』 平取町文化財調査報告書Ⅲ
- 平取町教育委員会 2000『平取町亜別遺跡』 平取町文化財調査報告書13
- 水沢市教育委員会 1982『慶徳遺跡群詳細分布調査報告書』 水沢市文化財報告書9
- 南北海道考古学情報交換会・東日本埋蔵文化財研究会 1997『第6回東日本埋蔵文化財研究会資料集 遺物からみた律令国家と蝦夷』
- 箕島栄紀 2001『古代国家と北方社会』 吉川弘文館
- 村上 隆 2007『金・銀・銅の日本史』 岩波新書1085
- 盛岡市教育委員会 1985『志波城跡～昭和59年度発掘調査概報～』
- 山本賢三 1961『東和町丹内山神社経塚発掘調査報告』 東和町教育委員会